

Salinger とイギリス：“For Esmé— with Love and Squalor” 再読

藤 田 眞 弓

Rereading "For Esmé— with Love and Squalor"— "For Esmé," Made in England

Mayumi FUJITA

要 旨

J. D. Salinger の短篇 "For Esmé— with Love and Squalor" (1950) には Salinger が第二次世界大戦中の1944年にイングランド南西部 Devon 州の Tiverton にある第4歩兵師団司令部に配属され、そこに3カ月間滞在していた時のイギリス滞在経験が反映されている。本論はデヴォンを舞台にした作品の前半パートに注目をし、ノルマンディー上陸作戦に赴く直前まで Salinger が滞在したデヴォンでの経験が、作中で語り手 (X軍曹) が戦場を生き延び、その後 PTSD から回復することに深く関わりがあることを検証する。

キーワード：J. D. Salinger, 短篇小説, アメリカ文学, イギリス

0. はじめに

Salinger は第二次世界大戦中の1944年にイングランド南西部 Devon 州の Tiverton にある第4歩兵師団司令部に配属され、そこに3カ月間滞在していた。この時のイギリス滞在経験が *Nine Stories* (1953) に収められている短篇 "For Esmé— with Love and Squalor" (1950) (以下 "For Esmé") に反映されている。

Little, Brown から2001年に出版された *Nine Stories* のペーパーバック版で42頁 (*The New Yorker* 発表時 [1950年4月8日号] は9頁) から成る本作は、その内の前半25頁分を1944年の4月にデヴォン州で Esmé と主人公である語り手とが出会い、ティールームで過ごした30分間の場面が占めている。(ペーパーバック版の冒頭の約1頁は1950年に、語り手が Esmé から結婚式の

招待状を受け取ったことや、妻と相談した結果、結婚式に行かないことを決めたことを語ることに充てられている。) 作品の後半では、語り手が一人称語りから三人称語りに変化し、語り手は Sergeant X として語られている。この1945年の部分は、Salinger の戦争経験を下敷きとしており、Xの戦争体験、そしてそれによる PTSD (心的外傷後ストレス障害) にXが苦しんでいる姿を描いている。後半の部分こそが、語り手 (すなわちX軍曹)、延いては作者 Salinger の戦争体験と、如何に彼が PTSD に苦しめられたかを知ることができる重要なパートであると思われるかもしれない。しかしながら、本論はイングランドのデヴォンを舞台にした前半のパートに注目をし、歴史上最大規模の上陸作戦とされるノルマンディー上陸作戦に赴く直前まで Salinger が滞在したデヴォンでの経験が、作中で語り手 (X軍曹) が戦場を

生き延び、その後 PTSD から回復すること（より正確には、その可能性を示唆すること）に深く関わりがあることを検証する。

1. Salinger, Made in England?

Mark Hodkinson は BBC Radio 4 のドキュメンタリー番組 *J. D. Salinger, Made in England* で Salinger のデヴォンでの滞在経験が "For Esmé" の創作には勿論、*The Catcher in the Rye* の主人公 Holden Caulfield を創り出すのにも大きな影響を与えたと主張している。

"Salinger later told friends that England changed him and his writing." Hodkinson said. "The slower pace of life, the matter-of-factness of the people and the green landscape brought more reflection to his work. He announced soon afterwards that he was going to be more 'sympathetic' to his characters, including Holden Caulfield, the anti-hero of *The Catcher in the Rye*, on which he was already working in Devon." (Sherwin "*The Catcher in the Rye* 'was inspired by Devon town of Tiverton' ")

Hodkinson の取材に同行した Leister 大学の Sarah Graham (2007年に出版された Routledge Guide to Literature シリーズの *J. D. Salinger's The Catcher in the Rye* の著者) も以下のように述べている。

Dr. Sarah Graham, lecturer in American Literature at the University of Leicester, who wrote a 2007 reader's guide to *The Catcher in the Rye*, said Salinger may even have sentimentalised Devon: "It is the last peaceful place he was in before going to war, you might feel a deep sense of attachment. He had a real fondness for England.

It is a hugely changing experience for Salinger." His writing became less sarcastic and his characters more sympathetic as a consequence. (Sherwin "*The Catcher in the Rye* 'was inspired by Devon town of Tiverton' ")

The Catcher in the Rye のテキストの「言語、テーマ、そしてスタイルは非常に影響力が大きく、Holden Caulfield は代表的 (iconic) なフィクションキャラクターで、悩みを抱えた若者の象徴」(Graham "Introduction" xi) であり、そもそも彼はアメリカ人であるのだが、「大いにイギリス生まれである」("it was very much made in England") (Sherwin "*The Catcher in the Rye* 'was inspired by Devon town of Tiverton' ") だと言うのだ。

Salinger が従軍中も、Holden の物語を執筆し、*The Catcher in the Rye* の構想を練り続けていたのは事実である。

From Salinger's letters, we could learn that during the pre-D-Day buildup he was writing hard and hard actually completed six chapters of the Holden Caulfield novel. He was convinced, we discover, that a new element of warmth can be detected in his work, and that he might finally have outgrown his old destructive habits. And this, of course, is a development from the authorial worries that had afflicted him in 1942. Then, the urge toward warm-heartedness was abstract, willed.... In 1944, the difference was that Salinger begins to experience— for maybe the first time in his life— a sense of tribal solidarity. (Hamilton 82)

だからと言って、*The Catcher in the Rye* のテキスト全般や Holden のキャラクターが専らイ

ングランドのデヴォンでの経験に影響を受けて書かれたかどうかには議論の余地があるのではないだろうか。しかしながら、少なくとも、"For Esmé"に関しては、その舞台がデヴォンであること、実際に Salinger が聖歌隊の合唱を聴くために通った教会が、語り手が Esmé に初めて出会う教会のモデルになっていること (Hamilton 82; Slawenski 80) などから、Salinger のイギリス滞在経験が (Jean Miller という少女の存在とは別に) その創作に大きな影響を与えたと断言しても良いだろう。

2. "For Esmé," Made in England

この節では、Salinger のイギリス経験と、彼がイギリスから見たアメリカが "For Esmé" の中でどのように描かれているかを見ていく。

教会で聖歌隊の練習を見学した後、語り手は民間人向けのティールームに入る。そこで語り手は女性店員に「できれば乾いたレインコートを着た客が良かったと思っているかのような目で見られ」("looked as if she would have preferred a customer with a dry raincoat.") (137)、それ故に「出来るだけ慎重にコート掛けにコートを引っ掛けた」("I used a coat tree as delicately as possible") (137)。続く Esmé との遭遇 (正しくは再会) の場面でも、Esmé に見つめられ、微笑みかけられた語り手は自身の振る舞いを強く意識する。

She stared back at me, with those house-counting eyes of hers, then, abruptly, gave me a smile, qualified smile. It was oddly radiant, as certain small, qualified smiles sometimes are. I smiled back, much less radiantly, keeping my upper lip down over a coal-black G. I. temporary filling showing between two of my front teeth. (139)

デヴォンの土地の人々からの視線を感じ、それが語り手をナーバスにしたり、自身の振る舞いを

意識させたりしているのだが、これは実際に Salinger が経験したことでもあるらしい。Salinger はイギリスに来て初めて、自分がアメリカ人、アメリカ兵であることをデヴォンの人々にじろじろと見られることで強く意識したと言う (Hamilton 82)。Salinger 同様、語り手も女性店員と Esmé の視線により、自分が「イギリスにいるアメリカ人、アメリカ兵」であることを強く意識しているのではないだろうか。

また、Salinger はデヴォンの土地の人々からの視線でアメリカ人であることを意識させられただけでなく、日々、戦争で心が荒んだイギリス兵やデヴォンの人々と触れ合いを持っていた (Slawenski 80)。この経験は Esmé が語り手に話し掛けた理由、"I purely came over because I thought you looked extremely lonely. You have an extremely sensitive face." (144) に表れているのではないだろうか。

次に語り手は側にやって来た Esmé のドレスに注目する。彼女は "a Campbell tartan" (139) のドレスを着ていた。Esmé が身に着けていたタータンはクラン・タータンと呼ばれるスコットランドの由緒ある氏族とその家族が身に着けられるタータン ("Campbell of Cawdor" [ウィルトン 70]) なのか、クラン・タータンよりも明るい色合いで白が基調のドレス・タータンの一つ、Modern Campbell Dress (奥田 79) なのか、語り手の記述からは判別できないが (何れにせよ緑色が基調のタータンであるようだ)、タータンを愛したヴィクトリア女王以降スコットランドだけでなく、イギリス全体のナショナリズムの象徴となっているタータン・チェック (奥田 31, 37) のドレスを Esmé が着ていたこと、そして語り手がそれに注目したことには意味があると考えてよいのではないだろうか。また、語り手が Esmé のドレスを一目見て、それを "a Campbell tartan, I believe." (139) と述べていることから、語り手がもともとタータンに精通しているか、そうでなければ Esmé に贈るこの物語を書く過程においてタータンについて調べていると考えられる。このことか

らも、語り手のイギリスに対する強い関心を伺い知ることができる。

会話の口火を切ったのは Esmé の “I thought Americans despised tea,” (139) という発話である。アメリカ独立戦争のきっかけとなった、独立派がイギリスの象徴とも言える茶を大量に捨てたボストン茶会事件以降、アメリカ人は好んで紅茶を飲まなくなったという偏見から来ているかもしれないこの発言だが（そして語り手もアメリカ人の中には「紅茶しか飲まない者もいる」[139]と即座に反論をしている）、二人の会話のきっかけが、イギリスが世界に誇る事の出来る数少ない自国の「食文化」である紅茶であったことは重要な意味があるのではないだろうか。

次に語り手が、聖歌隊の合唱練習で、Esmé の歌声が他の子供達からは「離れて聴こえていた」 (“her voice singing separately form the others.”) (140-41), そして Esmé がとても良い声をしていると述べると、Esmé は将来プロの歌手になりたいことを明かす。

“Really? Opera?”

“Heavens, no. I’m going to sing jazz on the radio and make heaps of money. Then, when I’m thirty, I shall retire and live on a ranch in Ohio.” She touched the top of her soaking-wet head with the flat of her hand. “Do you know Ohio?” she asked. (141)

Esmé はアメリカに渡ってジャズシンガーになりたいのだと言う。その上、引退後はオハイオの牧場で暮らすと言うのだ。Esmé のこの発言からは、彼女の戦後を生きる決意（作品の冒頭で語り手が Esmé からイギリスで執り行われる結婚式に招待されていることから、彼女がアメリカでジャズシンガーになる道を選ばなかったことは既に明らかにされているのだが）を読み取ることが出来る。Esmé は貴族の称号を持ち、イギリスの上流階級に属しており、「これまで出会ったほとんど

のアメリカ人は動物のように振る舞う」 (“‘Most of the Americans I’ve seen act like animals.’”) (142) と、アメリカ人の粗野な振る舞いに批判的である。しかしながら、Esmé はイギリスでオペラ歌手になるのではなく、アメリカでジャズシンガーになることで「大金を稼ぐ」 (“‘make heaps of money’”) (141) ことを夢見ているのである。このことから、Esmé には、20世紀に入り斜陽化するイギリスの貴族階級（森 13）と、二つの大戦を経て衰退する大英帝国の姿が見えていたと考えることが出来る。Esmé は戦後の世界において覇権を握るのはイギリスではなくアメリカであること、即ち、時代はパクス・ブリタニカからパクス・アメリカーナへ移行することを見抜いているのではないか。また、田中啓史は Esmé の「アメリカに対するこの屈折した感情は、ドイツに攻められて劣勢な祖国イギリスと、強力な援軍として登場したアメリカとの関係を、そのまま映している」（田中、『ミステリアス・サリンジャー』173）と指摘している。

Esmé の戦後を生きる決意に対する語り手の気持ちは（これは1944年のパート全体について言えることなのだが）、非常に抑制された間接話法故に、明白には分からない。語り手はオハイオについて、簡単なコメント（「何度か列車で通ったことがあるが、良くは知らない」[141] や「オハイオ周辺には広大な荒々しい土地が広がっている」[141]）をしているのみである。しかしながら、語り手は Esmé のアメリカ人の粗野な振る舞いに関する報告に対しては、彼らを擁護する発言をしている。

I said that many soldiers, all over the world, were a long way from home, and that few of them had had many real advantages in life. I said I’d thought that most people could figure that out for themselves.

“Possibly,” said my guest, without conviction. (143)

Esmé は語り手の言葉に、「そうかもしれない」と納得いかない様子で応じているが、ここに「アメリカに対する屈折した感情」を持ってアメリカ人を見る Esmé と、イギリスで、イギリス人に見られることで、自分がアメリカ兵であることを強く意識させられた Salinger の経験が反映されている語り手との間の「溝」を垣間見ることが出来る。

語り手の、Charles の "the Bronx cheer" (「野卑なやじ」) (148) に対するコメントを機に、二人の話題は「ユーモア」に及ぶ。

"You have a dry sense of humor, haven't you?" she said— wistfully. "Father said I have no sense of humor at all. He said I was unequipped to meet life because I have no sense of humor."

Watching her, I lit a cigarette and said I didn't think a sense of humor was of any use in a real pinch.

"Father said it was."

This was a statement of faith, not a contradiction, and I quickly switched horses. I nodded and said her father had probably taken the long view, while I was taking the short (whatever *that* meant). (148)

この二人のやり取りから、イギリス人とアメリカ人のユーモアに対する考え方の相違が見て取れる。Esmé は生きる為にはユーモアが必要だと言う父の言葉を強く信じている。一方で語り手は、ユーモアは本当に困難に陥った時には何の役にも立たないと主張する。

イギリスはその文学史においてユーモアの要素が「14世紀の Chaucer 以来、Shakespeare や18世紀を経、19世紀の Lamb の随筆などを頂点として、同世紀後半の Dickens や20世紀の随筆文学などに至るまで、脈々と続いていて、その伝統の深さ・息の長さは、他国文学に比類を見ないほ

どである」(三宅川 はしがき i)。Priestley は著書 *English Humour* の第1章で「イギリス人の住む大気 (the atmosphere) がユーモアを生み出すのに適している」(9) と述べている。

It [the atmosphere] is so often hazy, and very rarely is everything clear-cut. True humour, as distinct from what is merely laughable, comes out of a mixture of many ingredients, though even these may be hazily gathered and compounded. Not all the following are absolutely essential, but the mixture will be richer if they are all found in it: a feeling for irony; a sense of the absurd; a certain contact with reality, one foot at least on the ground; and, perhaps at first sight surprising, affection. (9)

Priestley は真のユーモアには、アイロニーや不条理を感じ取れる能力、現実的であること、そして愛情が必要であると主張している。イギリスの「日光の当たることの乏しい北歐的気候は、そのまま英国人の心の中にうっ陶しい雰囲気を生ぜしめ、それが *English Humour* の生成にも影響を及ぼしている」(三宅川 8) のだが、このイギリス特有のユーモアこそ、第二次世界大戦中の、重苦しく憂鬱な状況を生き抜くために必要な要素なのではないだろうか。故に語り手は、「それがどういう意味であれ」(148)、Esmé の父の意見に賛同する旨を彼女に伝えたのではないだろうか。

3. まとめ

これまで見てきたように、"For Esmé" は Salinger が1944年に経験したイギリスの描写や彼がデヴォンで感じたことの表象で溢れている。また、Salinger の3ヶ月のイギリス滞在は、Hamilton や Slawenski の Salinger 伝から分かるように、Salinger に自分がアメリカ人であることを強く意識させ、イギリスという離れた土地

からアメリカを見つめ直す機会ともなったのだが、このことも、本作では、Esméがアメリカに渡ってジャズシンガーになりたいと思っていることや、語り手と Esmé のユーモア観の相違から伺い知ることが出来る。

Salinger がその師 Whit Burnett に宛てた手紙で述べているように、彼はイギリス滞在中に作品の登場人物や実人生で出会う人々に優しくなろうと決意し、自身の作品に心の温かさが宿っていると確信をしていた（Hamilton 82; Slawenski 80）。しかしこの事が、本論の「はじめに」で述べたように、*The Catcher in the Rye* のテキスト全体や、Holeden のキャラクター造形に専ら影響を与えているとは断言することは出来ない。それでも、“For Esmé”においては、Salinger のイギリス滞在中の決意や確信が、Esmé が語り手の魂を救うという設定を可能にしたと考えることは可能である。

1944年のパートにおいて、直接話法で語られる Esmé の最後の言葉、“I hope you return from the war with all your faculties intact.” (156)、この言葉通りに語り手が戦場を切り抜けることが出来たとは言い難く、彼が心身共に大きな傷を負っている様子が、後半の1945年のパートでは詳細に語られている。しかし、最後の場面で Esmé からの手紙と手紙の追伸にある Esmé の弟 Charles が書いた10個の“Hello”とスペルを間違えた彼の署名 (“CHALES” [172]) を読み、そして Esmé の父親の形見の腕時計を手にした X 軍曹は、久しぶりに「ほとんど恍惚に近いほどの」(173) 眠気を覚える。

You take a really sleepy man, Esmé, and he *al*-ways stands a chance of again becoming a man with all his fac— with all his f-a-c-u-l-t-i-e-s intact. (173)

田中啓史はこの部分について、「三人称から一人称にもどったこの語りかけの文体こそ、X が「私」を回復した証しなのだ」(田中、『サリンジャー

イエローページ』112) と述べている。一方、野間正二は1945年のパートで語られる X 軍曹の PTSD の兆候を詳細に分析し、彼が戦後5年経った1950年の時点においても、精神の失調からはまだ完全に回復をしていないと述べている（野間 74）。

確かに、語り手が戦争による PTSD を完全に克服出来たかどうかは議論の余地があるのだが、Esmé との出会いが、語り手が PTSD を克服すること（少なくとも、彼が久々に深い眠りにつけることでそこから回復する可能性を示唆すること）を可能にしていることにおいて、他の Salinger 作品には見られない「救い」や「温かさ」を本作に見出すことが出来るのではないだろうか。

このことは“A Perfect Day for Bananafish” (1948) において“For Esmé”の語り手同様、戦争による PTSD に苦しむ Seymour が Sybil によって救われることなく、自ら命を断つことと対照的である。

“For Esmé”には主人公が PTSD に苦しむ帰還兵という点以外にも、“A Perfect Day for Bananafish”を想起させる場面が二つある。一つ目は、語り手が Charles に「君は本当に緑の目をしている」(146) と話した時の「オレンジ色だよ」(“They're orange,”) (146) という Charles の返答は、Seymour が Sybil の黄色い水着を青だと言う場面 (17) を想起させる。もう一つの場面は、高橋美穂子が指摘しているように、1945年のパートで、X 軍曹が両手をこめかみに強く押し当てる描写は、Seymour が“A Perfect Day for Bananafish”の最後の場面で、拳銃を右のこめかみに当てる姿を想起させる（高橋 159）。

このように、帰還兵の苦しみ、無邪気な子供との「色」をめぐるちぐはぐなやり取り、そして主人公がこめかみを、一方は手で、もう一方は拳銃で、強く押す描写という類似する要素がありながら、“For Esmé”では少女と少年が語り手の魂を救っているのだ。ここにはやはり、Salinger のイギリス滞在の経験が反映されているのではないだろうか。

The image of J.D. Salinger wandering the streets of Tiverton in pensive solitude illustrates the contemplative mood that absorbed him while he was stationed in England. During the months he trained for the invasion, Salinger began to reevaluate his attitude toward both his writing and his life. (Slawenski 80)

Bibliography

- Bloom, Harold, ed. *Bloom's Modern Critical Interpretations: J. D. Salinger's The Catcher in the Rye, New Edition*. New York: Bloom's Literary Criticism. 2009.
- 一. *Bloom's Modern Critical Views: J. D. Salinger, New Edition*. New York: Bloom's Literary Criticism. 2008.
- French, Warren. *J. D. Salinger*. New York: Twayne, 1963.
- 一. *J. D. Salinger, Revisited*. Boston: Twayne, 1988.
- Graham, Sarah. *J.D. Salinger's The Catcher in the Rye*. London and New York: Routledge, 2007.
- Hamilton, Ian. *In Search of J. D. Salinger*. London: Heinemann, 1988.
- Hodokinson, Mark, Present. *J. D. Salinger, Made in England*. BBC Radio4. 18 Feb. 2016.
- Priestley, J. B. *English Humour*. London: Heinemann, 1976.
- Rebel in the Rye*. Directed by Danny Strong, performed by Nicholas Hoult, IFC Films, 2017.
- Salinger, J. D. "For Esmé— with Love and Squalor." 1950. *Nine Stories*. pp. 131-173.
- 一. *Nine Stories*. 1953. New York: Back Bay Books/Little, Brown, 2001.
- 一. "A Perfect Day for Bananafish." 1948. *Nine Stories*. pp. 3-26.
- Sherwin, Adam. "The Catcher in the Rye' was inspired by Devon Town of Tiverton.'" *Independent*. 13 Feb. 2016, <https://www.independent.co.uk/arts-entertainment/books/news/catcher-rye-was-inspired-devon-town-tiverton-a6872251.html>. Accessed 19 Dec. 2020.
- Shields, David and Shane Salerno. *Salinger*. New York: Simon & Schuster, 2013.
- Slawenski, Kenneth. *J. D. Salinger: A Life*. New York: Random House, 2011.
- 井野瀬久美恵編. 『イギリス文化史入門』. 京都: 昭和堂, 1996.
- ウィルトン, ブライアン他. 『タータン 伝統と革新のデザイン』. 京都: 青幻舎, 2018.
- 岡谷慶子. 「アメリカ人とお茶: アメリカの食文化 (I)」. 『静岡産業大学情報学部研究紀要』. 第8号, Mar. 2006, pp.133-159.
- 奥田実紀. 『タータン・チェックの歴史』. 東京: 河出書房, 2013.
- 高橋美穂子. 『J. D. サリンジャー論—「ナイン・ストーリーズ」をめぐって』. 東京: 桐原書店, 1995.
- 田中啓史. 『サリンジャー イエローページ』. 東京: 荒地出版, 2000.
- 一. 『ミステリアス・サリンジャー 隠されたものごた』. 東京: 南雲堂, 1996.
- 富山大佳夫. 『笑う大英帝国』. 東京: 岩波書店, 2006.
- 中西輝政. 『大英帝国衰亡史』. 東京: PHP 研究所, 1998.
- 野間正二. 『戦争 PTSD とサリンジャー』. 大阪: 創元社, 2005.
- 三宅川正. 『英文学におけるユーモアと諷刺の伝統』. 大阪: 関西大学出版部, 1981.
- 森川展男. 『サリンジャー 伝説の半生, 謎の隠遁生活』. 東京: 中央公論社, 1998.
- 森護. 『英国の貴族 遅れてきた公爵』. 東京: 大修館書店, 1987.
- 『monkey business』 vol. 3 Fall 2008. ヴィレッジブックス.